

あなたのスキルは社会に役立つ

エンジニアだからできる社会貢献

東日本大震災の発生直後に発足したHack For Japanや「市民が主体となって自分たちの街の課題を技術で解決するコミュニティ作り支援」を掲げるCode for Japanのメンバーを始めとして、日本各地で技術を活用した社会貢献活動が行われています。本連載では、防災や減災、地域の活性化や課題解決、そして人材育成など、「エンジニアだからできる社会貢献」の取り組みをお届けします。

第112回

東日本大震災から10年

- 高橋 憲一 (たかはしけんいち) [Twitter](#) @ken1_taka
- シニアプログラミングネットワーク 小泉 勝志郎 (こいずみかつしろう) [Twitter](#) @koi_zoom1
- Code for Japan 関 治之 (せきはるゆき) [Twitter](#) @hal_sk
- 及川 卓也 (おいかわたくや) [Twitter](#) @takoratta

2011年3月11日に東日本大震災が発生しました。ITの力で何かできないかと考えた人たちが集まり、震災発生から8日後にHack For Japanの最初のアイデアソンとハッカソンが開催され、そのあとも下記のようなコードで「日本が復興するまでハックし続ける」という想いを掲げて各地でさまざまな活動を行いました。

```
while (Japan.recovering) {  
  we.hack();  
}
```

この連載は「Hack For Japan～エンジニアだからこそできる復興への一歩」というタイトルで2011年の11月号から始まり、タイトル変更と扱う内容を広げながら今号で112回目を迎えました。当初はHack For Japanの活動について紹介する内容でしたが、その後立ち上げられたCode for Japanについて触れることが増えてきたためにCode for Japanとの共同連載という形になりました。

そして現在はHack For Japanそのものとして活動することはないものの、中心になっていたメンバーやそのつながりでIT DARTやGovTechなどエンジニアによる社会貢献の機会はむしろ増えており、より広い範囲のテーマを扱っていけるようになるために前々号から現在のタイトルになっています。「コードでつなぐ。想いと想い」＝「開発者の『何かしたい想い』と被災者の『切実な想い』をつなぐ場を訴求する」ところから始まったこの活動が、東日本大震災から10年という時間が経つ今にどのよう

な形でつながっているか、初期のころからさまざまな形で活動を続ける3人のそれぞれの視点であらためて見てみます。

被災から現在までの復興活動

10年前の記憶がよみがえる

2021年2月13日23時8分、福島県沖で地震が発生し、福島県では震度6強、筆者(小泉)の住む宮城県塩竈市しおがまでは震度6弱の揺れがありました。揺れは長時間にわたり、我が家は一時的な停電になり本棚やタンスが倒れるほど。長い揺れは東日本大震災のときの体験を思い起こさせるものでした。

東日本大震災当時はTwitterで情報共有していましたが、筆者(小泉)の場合、今回はClubhouse^{※1}がその役目を果たしました。声を聴けることで安心感を得た方もいるようです。地震発生時お風呂に入っていた方にとっては全裸での参加だったそうで、そんなところにも音声SNSのメリットが発揮されるもんだななど。

話を戻して、不幸中の幸いで2月13日の地震では津波の心配がなかったので避難せずに済みましたが、東日本大震災では筆者(小泉)自身被災者でもありました。本節では被災者としての視点と、復興活動を行う者としての視点の双方で語ります。

注1 2021年1月末から日本でも広がり始めた、音声SNSアプリケーション。

東日本大震災での被災

3.11の東日本大震災発生時刻である14時46分。筆者(小泉)は仙台市泉区にある、当時勤めていたシステム会社での業務中でした。自宅である宮城県塩竈市へは歩くと5時間以上かかるので、避難場所まで夜を明かし、翌日歩いて自宅へ。

自宅は沿岸部にあることもあり、庭で魚が泳いでいました(本当)。親戚宅での避難生活をこのあと2ヵ月ほどすることになります。

ただ、弟が当時塩竈市の離島である浦戸諸島で漁師見習いをしており、そちらでは家屋の半数以上が津波で流され弟の自宅も船も職場も流されている状況でした。

うらと海の子再生プロジェクト

弟が勤めていた浦戸諸島の漁業は大打撃を受けました。そこで復興のために立ち上げたのがうらと海の子再生プロジェクト^{注2}です。1口1万円で、震災から復興したら海産物で支援してくれた人に返すというもの。現在ではメジャーとなったクラウドファンディングを行ったものでした。

漁師である弟をリーダーとし、筆者(小泉)は企画の発案とシステムの開発を行いました。2ヵ月間で1億8,600万円ほどを集め、現在でも日本では有数の金額を集めています。

2011年震災直後当時のまだ日本にクラウドファンディングプラットフォームがない中、自らプラットフォームを作成して実施しています。海外のクラウドファンディング事例は知っていましたが、日本に同種のものは無い。しかし、お金を集めるタイミングとして震災直後のこのタイミングに始めなければならない、として作成しました。そのため、当時知名度のなかったクラウドファンディングという名前ではなく「1口オーナー制度」という名前なのです！クラウドファンディングという呼び名は、今やすっかりメジャーになりましたね。

現在は住所が不明な方をのぞき、リターンとなる

注2 <http://www.uminoko-saisei.net/>

海産物の返送を終えています！さらに、海産物販売会社を作り、当時漁師見習いだった弟が社長となり、宮城県の海産物を全国へお届けしています。

島ソソとぎばさちゃん

筆者(小泉)は東日本大震災以前からITコミュニティ系のイベントを頻繁に開催していました。ただ、震災復興の活動とITコミュニティの活動が絡んでいないので、絡めることをやりたいという思いから2014年に団体「Code for Shiogama」を立ち上げました。そして、浦戸諸島で行ったのが2014年5月に開催した「島ソソ」というハッカソンです(図1)。島に暮らす人と島で働く人の課題をITの力で解決しようというもの。ここから浦戸諸島を舞台としたゲーム「Island Girls」、そして新しい名物を作ろうということで海藻アカモクをフィーチャーした「渚の妖精ぎばさちゃん^{注3}」が誕生しました。とくにぎばさちゃんは今も元気に活躍中です。ねばぎば！

10年の節目に

Code for Japan Summit 2021は東日本大震災から10年であることがテーマの1つ。10年の節目にこの震災で学んだことをこれからの活かせるよう頑張っていきます！

Code for Japanの誕生と発展

東日本大震災が発生したとき、筆者(関)は東京の

注3 <https://twitter.com/gibasachan>

◆ 図1 島ソソ





ミッドタウンで働いていました。幸い家族とはすぐに連絡がついたのですが、テレビやTwitterで流れてくるさまざまなニュースに、「日本はどうなってしまうのだろう」という不安を感じていました。そんな中、当時アクティブに活動していたOpen StreetMap^{注4}のメーリングリストに、当時の代表であった三浦さんから、「今こそ活動すべき」という投稿があり、参加したのがsinsai.info(図2)という情報収集プラットフォームです。その後Hack For Japanが立ち上がり、ハッカソンや現地視察などの活動にも参加させてもらいました。

おかげさまで sinsai.info は多くの人に使ってもらいましたが、そのころから筆者(関)の頭には、「テクノロジーは本当に人を幸せにできるのだろうか?」という疑問がついてまわるようになりました。というのも、情報収集プラットフォームであるsinsai.infoは実際には現地の人には使えませんでしたし、被災地に視察に行ったときにも、テクノロジーを活用できることはあまりなかったからです(これは当時の筆者(関)の知識不足も多かったですが)。

それよりは、地域コミュニティがしっかりとしていることのほうがレジリエンスには重要なことでした。コミュニティが強固なところは逃げ遅れた人も少なかったし、復興への動きも早かったと思います。

しかし、その後遠野市のボランティアセンターで出会った方から、「ITで解決してほしいこと、たくさんあります!」と言っていたが、本当に救われ

た思いでした。

自治体のIT活用についての課題もいろいろと感じることができましたが、ちょうど日本政府がオープンデータの推進政策を始めるというタイミングもあり、行政のIT活用と地域コミュニティをITでつなげることができないかを考え始めました。

まったくリソースがない中でどうしたら良いのかを考えていたところ、Code for Americaの創業者であるジェニファー・パルカさんの「コーディングでより良い政府を作る」というYouTube動画を見たときに、「これだ!」という閃きを受けて、2013年にCode for Japanを設立することになります。

手探りで始めた活動ですが、オープンソースコミュニティの経験を活かして、草の根のコミュニティづくりを実践してみたところ、多くの仲間が集まってくれました。

今では80以上の地域でCode for X(Xに地域名が入る)が活動していますし、コロナ禍では東京都の新型コロナウイルス対策サイトを開発するなど、いろいろなチャレンジをさせてもらっています。この連載でも何度か活動を紹介させていただきます。

最近はとても忙しいような気もするのですが、実はGitHubでのアクティビティ数は上がっています。これは移動時間が減って四六時中家にいるからかもしれない。自分はやっぱりコーディングをしているのが好きだし、コードを書くことで1ミリくらいは課題解決に近づいているという感覚が好きなのだなぁとあらためて思います。

昨年3月ごろにツイートした「心がザワザワしている時は、手を動かそうと思う。どんどん流れてくるニュースのシェアばかりしてても、自分の心の安寧は得られない。コードを書こう!」という発言^{注5}がたくさんリツイートされましたが、東日本大震災でsinsai.infoを始めたときにも同じような気持ちになったことを覚えています。

コードを書き始めるということは、課題の傍観者から解決側に足を一歩踏み込むということです。始めるいろいろな別の問題にぶつかりますし、そん

注4 <https://openstreetmap.jp/>

◆ 図2 sinsai.infoのページ



注5 https://twitter.com/hal_sk/status/1233902877069869056

なに簡単に課題は解決しないのですが、少なくとも課題に対する解像度は上がります。

シビックテックは銀の弾丸ではけっしてなく、テクノロジーで解決できることなど、たかが知れています。

ただ、不平不満を言うのではなく、できるだけ多くの人が「ともに考え、ともにつくる」ということを実践すれば、世の中は今よりは良くなるという思いは変わりません。

もしご共感いただけるならば、ぜひCode for Japan^{注6}のサイトを訪れてください。

IT×災害からIT DARTへ

2011年3月11日の午後、筆者(及川)はオフィスのある六本木ヒルズで強い地震に襲われました。エレベーターも止まり、オフィスの外に出ていた社員が困っているなどの話も聞こえてきましたが、すぐにそのレベルの話ではないこともわかり、都内の交通が完全に麻痺した当日は筆者(及川)も帰宅困難者となりました。家族とも連絡がとれず、帰宅したのは早朝のことでした。そのあとも不安な日々を過ごしていたのですが、東北のより被害が大きい地域では、福島第一原発事故もあり、まさに生死を争う状況でした。テレビなどで流れてくる事態の深刻さに深い悲しみを覚え、電気などのライフラインの復旧が進む中、我々が生活を支えるまでになったと自負していたインターネットがつながらない状況が続くことに歯がゆさを感じ、自衛隊や災害ボランティアが復旧や復興活動に貢献する中、IT技術者が何もできないことに対する無力感を覚えました。そんな中、我々にも何かできるはずだという熱い想いを持つ仲間たちにも恵まれ、Hack For Japanという開発者コミュニティを立ち上げました。

Hack For Japanは善玉ハッカーとメディアにも言っていただくこともあり、おもにサービスやアプリの開発を目指して立ち上がりました。Hack For Japanの趣旨に賛同していただいたエンジニアの方

◆ 図3 「IT×災害」でのアンカンファレンスの様子



により、いくつかの成果といえるものも生み出しましたが、一方で「開発」という活動だけの限界も感じ始め、有志とともに「IT×災害」会議というものを開きました。2013年のことです。この会議では開発だけでなく、情報発信や活用、情報機器の手配や運用の支援など、幅広いITによる災害の復旧/復興支援、防災や減災を行っている個人や団体が一堂に会し、さまざまなことを議論することができました(図3)。この会議は2015年まで続きましたが、そこから生まれたのがIT DART(情報支援レスキュー隊)^{注7}という発災時のIT支援を行う団体です。筆者(及川)は発起人の1人として立ち上げに加わり、最初の代表理事も務めました。2016年4月の熊本地震や2018年7月の豪雨による水害などで実際に支援を行っています。

このようなシビックテック活動を通じてオープンデータの普及活動にも関わることになり、東京都のオープンデータ政策にも少し関わることになり、2020年にはあるカンファレンスで東京都の副知事である宮坂学氏と対談させていただく機会にも恵まれました。その中で、行政のIT化は「デジタルに変わる」のではなく、「デジタルでもできる」ようになるのだということを強く意識するようになりました。アナログかデジタルかではなく、アナログとデジタルでできるようになる、そんな社会はより良いものになっていくと思います。自分自身もその実現に向けてできることを続けていきたいと考えます。

SD

注6 <https://www.code4japan.org/>

注7 <https://itdart.org/>